

## 第 82 話〈牛馬墓地〉の要約と参考資料

### 第 82 話〈牛馬墓地〉の要約

土呂久では、亜ヒ酸と亜硫酸ガスがまじった空気を吸い、亜ヒ酸の粉をかぶった草を食べ、呼吸器と消化器を同時に犯されて死んでいく牛馬がつづきました。家畜保険ができたのに、「土呂久の牛は伝染病」という風評が広がって、保険にいらしてもらえませんでした。

### 第 82 話〈牛馬墓地〉の参考資料

#### 82-1 大正後期の牛馬被害について

池田牧然「岩戸村土呂久放牧場及土呂久亜砒酸鉍山ヲ見テ」より

其附近ノ牛ガ病氣ト云フ話デアルカラ、其ノ牛ヲ診断シテ見ルニ、營養不良、元氣無ク、歩行漫跚、皮毛光沢ヲ失シ、食欲不振、体温ハ平温、脈膊ハ弱イガ、呼吸器等異常ヲ認メズ。胃腸ノ蠕動ガ微弱デアル。時々、流涎泡ヲ吹き、全身戦慄スル事ガアル。診断シタノハ僅カニ二頭デアルガ、共ニ同一症状デ、病名ヲ付ケ兼ネル。昨年ノ秋、村長ノ依頼デ土呂久部落ノ病牛馬診断ヲ行ツタ高千穂警察署ノ衛生技手、郡畜産組合技術員ノ話ヲ聞イテモ、罹病牛馬十頭デ、其症状全部同一デ、全身点々脱毛シテ居タガ、矢張り病名ヲ付ケ得ナイト云ツテ居ル。

茲両三年間ニ同症状ノ牛馬ガ十六頭、昨秋転地セシメタモノガ十頭、斃死シタノガ、去ル七日郡畜産組合技手ガ警察官立会ノ下ニ死体剖検ニ因ツテ、鑑定材料ヲ岩戸村長カラ宮崎県警察部ヘ差出シテ置タ、彼ノ斃牛ヲ加ヘテ六頭デアツテ、現在罹病シテ居ル牛馬ガ四頭、転地療養中ノ牛ガ二頭居ルト云フ事デアル。転地セシムレバ、先ヅ營養、元氣共ニ、二、三ヶ月デ快復スルト云フ事デアル。

茲ニ好一例ヲ記セバ、亜砒酸鉍附近ノ一牝牛ヲ同所ヨリ約一里位ノ立宿部落ニ昨秋転地療養セシメタルニ、二、三ヶ月ニシテ快復シタカラ、厩肥生産ノ関係カラ本春引帰リタルニ、如何シテモ採食セヌノデ畜主ハ大変心配シテ、獣医ノ診断治療ヲ受ケタレド一向ニ効果ガナイ。其処ニ同家ヲ去ル約十四、五町位下部落（未ダ被害ナキ部落）カラ牛ノ飼糧ヲ持ツテ、茅駄<sup>カヤウ</sup>セニ来タモノガアル。其ノ飼糧ヲ引帰ツタ牛ニ与フレバ、元氣良ク採食シター方ニ於テ、同家デ作ツタ飼料ヲ他ヨリ来タ牛ニ与フレバ、之ハ決シテ食セナカツタノデアル。此一例ニ就テモ、予ハ質疑ヲ生ゼザルヲ得ナイノデアリマス。

其他変ツタ事モアルガ、以上ノ状況ニヨリ観察スルニ、亜砒酸鉍開山ノ為メ、其ノ附近農家ニ決シテ被害ガナイト云ハレマイト思フ。寧ロ有リト判断シテ誤ラザルモノト存ジマス。

82-2 齋藤正健報告「公害と教育（別冊資料）」（日教組第21次教育研究全国集会）

父母のアンケートから

部落名（土呂久惣見）

牛馬もせきをして、何頭も死んだと聞いています。解剖してもアヒの害とは言わなかったとか、伝染病だと言って深く深く掘らしていけさせたとか、また生きていても市場にひいていくのに、おしたり、ひいたりて苦労して行って、やせ牛でいくらもとれず、土呂久の牛は保険にも入れなかったそうです。

部落名（土呂久南）

牛馬胃腸をこわし、近所の牛馬は死亡した。その時の医者は「タンソ病」といい、他の牛馬にうつるとして地下4尺以上に掘りうめさせた。福岡鉱山監督署に土呂久より6人出頭した。輸出品だからといって、個人のいう事を取り上げてくれなかった。

部落名（土呂久南）

牛馬の草のうちクズ（ゴブリヨ）がなくなり、牛馬飼料に大変困った。馬が3頭死亡した。（そのうち馬2頭は出産直前だったので、体内の子馬とも、5頭死んだこととなります。）馬好きの父は一時は気持ちがいいならんばかりでした。その内の1頭は「農林大臣」より奨励金を授与した馬でした。

82-3 土呂久における牛馬の被害（\*81-2と重複）

土呂久での聞き取り

牛

佐藤正四さんの話（1981年10月8日聴取）

牛は昭和4年から16年の間に4頭死んだ。牛は鼻水をたらして死んだ。獣医は肺炎とかなんとか言いよった。鈴木日恵さんのごと、はっきり毒物とは言わなかった。

墓所場（牛馬墓地）

佐藤数夫さんの話（1977年6月6日）

奈戸（なこ）の上の徳松さんの土地。今は藤夫さんが杉の植林をしている。斜面を掘って、牛や馬の死体をいけた。そこは、平らにしとるのですぐわかる。2尺幅の道が「脇の谷」の横からついておって、部落のものが牛や馬をかかえて登った。距離は500メートルくらい。大きい牛は600キロもあるとですから、8人か10人以上おらんとかかえきらんとですよ。丸太に足を2本ずつくくって、逆さにつつて、心棒を通し、それに前と後ろに1本ずつ横に木を渡して、横木のはしにそれぞれ木を渡し、8点でかつぐ。重いときは、心棒の真ん中にもう1本横に木を渡す。前に背の低い人、後ろに高い人。急な坂道だから、途中で何度も休みながら行く。交代要員もついてい

く。死んだ牛が狭い山道の一番いい所（真ん中）を通過して、人間は脇を歩いた。

馬のときは、足が長いから、足の中途でくぐる。杉の丸太は長さ4～4メートル半。牛の体長は2メートルくらいある。岩ごつごつで、くぼみのような細い道。小鳥、谷川の音、対岸に畑中にそびえる山。死んだ次の日もはいける。何頭埋めてあったか、見当はつかない。

墓所場に大きい柿の木があった。この柿は、鉾山がったころも実をつけよった。いまは、株が残っているだけ。まわりは杉林。牛馬の栄養で育っている。

## 牛馬の死亡率

池田牧然「岩戸村土呂久放牧場及土呂久亜硫酸鉾山ヲ見テ」より計算した

牛馬の数 馬 32頭 牛 55頭

病気にかかった牛馬の数

ここ2, 3年 同症状の牛馬 16頭（死亡 6頭；昨秋転地中 10頭）

転地中だった10頭の牛馬

（罹病中 4頭；転地中 2頭；転地して回復 4頭）

罹病率 分母：現在の牛馬（87頭）+死んだ牛馬（6頭）=93頭

分子：病気にかかった牛馬 16頭

罹病率： $16 \div 93 \times 100 = 17.2\%$

死亡率 死亡率： $6 \div 93 \times 100 = 6.5\%$ （この2, 3年間）

\*西白杵郡勢要覧（大正9年9月4日発行）によれば、

斃牛（大正7年） 「千に対する斃死4」つまり0.4%。

## 飼料

佐藤ミキさんの話（1977年5月15日聴取）

「母屋」の草場は、尾曾宇（おぞ）とあおげ（黒葛原との境）にあった。クズの葉（まんまるい葉）がボロボロ落ちて、カズラもはわん。根はやられてないので、カズラの蔓はでるが伸びんで落ちてしまう。カヤをくくるとがねえなってしまう。クズの葉は牛のいちばんの栄養（いちばんの兵糧）やったのに……。油気がのして、カサカサして、やわらしいところがひとつもない。

ワラビは強い。ワラビんじょうできよったが、伸びてしもうたワラビは固うて、牛も食わん。

カヤはいま1メートルから1メートル20センチになるが、そのころは、いまの3分の1にしか伸びん。尾曾宇は「三百駄」というて、300頭の牛馬にかかるわけだけのカヤがある。それくらい広い草場。1駄は12把。

草を払うと、石灰かなんか撒いたごと、まっ白う散るわけ。

82-4 家畜保険について (\*81-2と重複)

土呂久での聞き取り

家畜保険について

佐藤正四さんの話 (1980年7月25日聴取)

土呂久の牛馬の死亡率が高いと言って、家畜保険組合に入れてもらえなかったのは戦前のこと。戦後は、農協共済の保険があるが、戦前は組合をつくっていた。

佐藤一二三さんの話 (1980年7月26日聴取)

昭和11年ごろまで牛は保険に入っていた。ところが、隣(「向土呂久」)の牛が5, 6匹死んで、いっぺんな伝染病というて、堆肥を前の畑を掘って捨ててしまた。その牛は墓所場で焼いた。それから「土呂久の牛は伝染病」というて、保険に入れてくれなかった。

宮崎県農業共済連合会の話 (1980年7月25日、電話で聴取)

昭和4年に家畜保険法が制定されて、牛、馬の保険制度ができた。郡単位で家畜保険組合をつくった。任意加入。

終戦後の昭和22年12月15日に農業災害補償法ができた。これは戦前の農業保険と家畜保険を合体したもの。23年4月1日に施行され、任意加入。翌24年、家畜共済の名前で義務加入となった。任意と強制の中間で、みんなで申し合わせて加入した。